

○地域・社会貢献研究

研究課題 「Aging in Place達成のための住民参加型食支援システム構築に関する地域研究」

- 研究代表者 看護学科 助教 那須真弓
- 研究分担者 看護学科 特任助手 矢野聡子
- 付属病院 講師 岸本浩
- 付属病院 看護師長 関友美
- 付属病院 主任 菅谷陽子
- 看護学科 教授 吉良淳子
- (13名) 横浜市立大学 看護学科 教授 千葉由美
- 常磐大学 看護学科 教授 市村久美子
- 市村歯科 歯科医師 市村和大
- 茨城県言語聴覚士協会 会長 磯野敦
- 茨城県栄養士会 副会長 伊東久美子
- 茨城県歯科衛生士会 副会長 中村郁子
- 阿見町役場高齢福祉課 係長 眞島美穂
- 研究年度 令和 4 年度
- (研究期間) 令和4年度～令和6年度 (3年間)

1. 研究目的

近年、高齢者に関する摂食嚥下機能、口腔機能の問題が生活の質や生命予後にまで影響を及ぼす因子として注目を集めている。その対策として、障害が顕在化しないうちからのリスクの改善を目指すポピュレーションアプローチが重要である。高齢者は加齢に伴い予備力の低下を来しやすく、入院を機に本来、摂食嚥下障害を来す疾患でないにもかかわらず、経口摂取が困難となり、その方の望む暮らしの継続が困難となるケースも多いことから、専門家によるシームレスな対応とシステムづくりは喫緊の課題である。しかし、茨城県内でこのような摂食嚥下機能に着目した系統だったシステムを構築している自治体は見当たらなかった。

そこで、本研究は、阿見町の高齢福祉課及び付属病院と連携・協働し（図1）、1) 地域在住高齢者の摂食嚥下機能の実態及びニーズ調査、2) 摂食嚥下障害について学ぶ場の提供、3) 摂食嚥下機能や口腔機能低下のスクリーニングを行う場の提供、そして、4) スクリーニングテスト陽性者に対する継続フォロー体制の構築を行うことを目的とした。

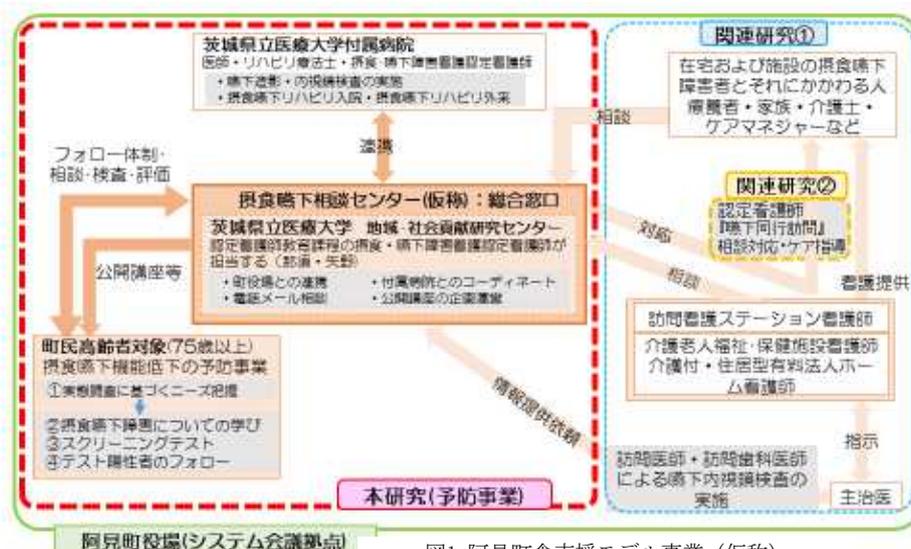


図1 阿見町食支援モデル事業 (仮称)

2. 研究方法

本研究は図1 阿見町食支援モデル事業（仮称）の一部として令和4年度は地域在住高齢者の摂食嚥下機能と摂食嚥下に関連するニーズを理解するため、質問紙郵送調査を実施した。対象者は要介護認定を受けていない後期高齢者1,000人を住民基本台帳から、層化無作為抽出し、調査内容は身体機能、摂食嚥下機能、摂食嚥下障害に関する講習会の参加の有無及び参加希望、摂食嚥下機能評価を受けた経験の有無及び希望、現在の摂食嚥下関連する困りごと、心配ごと等とした。

3. 研究結果 （一部抜粋）

1) 研究参加者の基本属性

	n	%	平均	標準偏差
年齢	601		75.0	4.17
性別	女性	304	50.4	
	男性	298	49.4	
	無回答	9	0.2	

2) 摂食嚥下機能

項目	回答	n	%
硬いものが食べにくくなった	はい	158	25.9
	いいえ	448	73.4
	無回答	10	0.7
お茶や汁でむせることがある	はい	162	26.6
	いいえ	441	73.1
	無回答	7	1.1

3) 予防事業参加の希望

項目	回答	n	%
学習会に参加したい	はい	170	27.9
	いいえ	415	68.0
	無回答	25	4.1
機能検査を受けたい	はい	229	37.5
	いいえ	356	58.4
	無回答	25	4.1

4. 考察（結論）

要介護認定を受けていない後期高齢者の中にも、摂食嚥下機能低下を来している者が一定数おり、阿見町においても摂食嚥下障害に移行させないための、ポピュレーションアプローチの重要性が示された。しかしながら、摂食嚥下に関する学習会や機能検査に「参加したい」、「受けたい」と回答したものの割合が高くないことから、今後、地域在住高齢者への摂食嚥下機能低下予防に関する、啓発やアプローチ方法の検討が必要である。

5. 成果の発表（学会・論文等、予定を含む）

日本摂食嚥下リハビリテーション学会で発表予定

6. 参考文献

Fujishima, I., Fujiu-Kurachi, M., Arai, H et al. (2019): Sarcopenia and dysphagia: Position paper by four professional Organizations, Geriatr Gerontol Int, 19(2), 91-97.